

清水卯三郎

—— 1867年パリ万国博をめぐって ——

澤 護

漢学を修め、応用化学に関心を抱き、ロシア語や英語を学び、商人としては初めて万国博覧会に出品しパリを訪れ、印刷機械や歯科器具の輸入をし、本屋を開いて洋書の輸入や翻刻をし、国語の改良問題では「平仮名ノ説」を発表し、幅広い活動をしながら波乱に富んだ一生を送った人物に、清水卯三郎（文政12年〔1829〕3月4日生、明治43年〔1910〕1月20日没）がいた。本稿は、清水卯三郎のパリ万国博への出品過程と出品物、その後の事後問題、洋行土産などを記述し、これまで不明であった諸点を解明しようとするものである。

フランスでは第二回目の万国博覧会がパリで1867年に開催されたが、この万国博では参加国に対し独自の建物を作らせ、その上、見世物の興行、料理の提供といった新しい工夫も取り入れ、開期中の有料入場者は百万人にも達し、成功裡に終わった博覧会であった。

パリ万国博覧会の開催される2年前の慶応元年（1865）に、フランスはかねてより親交のあった徳川幕府にも参加の勧誘をし、さらに將軍慶喜の出席を求め、それができないのであれば、しかるべき人物の派遣をするよう依頼してきた。これに対し、幕府はいち早く日本国の名を持って参加することを決め、軍制調査や横須賀製鉄所建設等の用務のため渡仏中であった柴田日向守剛中を通じて、フランス側に参加の由を伝達した。この折、外国奉行・柴田日向守は、富有な商人であり銀行家であったフランス人、

フルーリ・エラール (Flury Hérard) を在仏日本総領事とする旨を伝え¹⁾、一方、博覧会日本出品物総理事官にレセップ男爵を囑託した。

フルーリ・エラールは慶応2年正月19日、日本政府より正式の領事任命の達書を受け、万国博期間中に日本のために手腕を発揮することになったが、明治新政府の確立した後の明治元年6月に免職され、代って薩摩藩のために暗躍したモンブラン伯が総領事に任命されることになった。

一方、日本国代表としては、あれこれ人選の結果、慶喜の弟である徳川昭武民部大輔がパリに特派されることになった。数え年14歳の徳川昭武派遣の達は意外に遅れ、パリへの出発をまじかにひかえた慶応2年11月28日のことであつた。²⁾

パリ万国博覧会への出品物に関して、幕府は各藩に対し、藩の特産物を出品するように勧めたが、博覧会という耳慣れない言葉のためか、これに応じた藩は佐賀藩と薩摩藩だけでしかなかった。薩摩藩は幕府の命を無視して、独自の船で出品物を送り出したことから、パリ博覧会の陳列場のことで、幕府と薩摩藩との大きな紛争へと進展していくことになった。

慶応元年9月、幕府は出品物取り集めの儀につき申し合せをし、小栗上野介らが博覧会の担当官となり、各藩へ参加を勧誘すると同時に、市中の商人にも出品を呼びかけた。

この折の「仏国博覧会規則書」³⁾等を簡単に記述すると、パリ万国博は1867年5月1日開催されること、出品物は開期中は陳列されるが、閉会後に売買することは自由、その品物は新品でなくとも良いが、できるだけ優秀なものを出品すること、陳列場への出品料は不要であるが、飾りつけの費用は自弁であること、出品物は慶応2年5月中までに取り揃えること、最優秀の出品物にはフランス政府より褒賞がでることなどであった。

幕府のこのパリ万国博覧会への呼びかけに応じた人物に、埼玉県羽生で生れた清水卯三郎という商人がいた。清水卯三郎は箕作秋坪をたまたま訪

清水卯三郎

れ、語らううちに箕作よりこの博覧会の話しを聞き、出品を勧められて、大いに心を動かされ、吉田六左衛門（卯三郎の父が後妻を迎えた家で、卯三郎の妹むらの夫）ら数人の身内の者と相談した上で、時の勘定奉行・小栗上野介へ「ねかいのふみをこゝに⁴⁾ いたしはしめてそのゆるしをえた」のであった。

「博覧会出品蒐集掛拜命の件江戸商人卯三郎より願書 慶応二年二月十日

丙寅二月十日

乍恐以書付奉申上候

一今般仏蘭西ハリス府において展観所出来各國之奇貨名産輻輳仕候に付右場所江御國産御遣し被為遊候趣奉伺候間私共兩人乍恐御國柄に相叶候様精々盡心力良好之貨品差送り外國之耳目を驚御國恩之萬一に奉報度何卒出格之御慈悲を以前條御用被仰付候様偏奉願上候以上

慶応二寅年二月

浅草天王町 太右衛門地借

願人 卯三郎 ㊤

家主 太右衛門 ㊤

長井左衛門知行所武洲幡羅郡四方寺村

名主 六左衛門⁵⁾ ㊤

この願書と共に提出されたとみなされる卯三郎と六左衛門の「仏國博覧会出品書⁶⁾」をみると、大小刀、弓矢、火縄銃、陣羽織といった戦いに関わる品、酒、醤油、茶、粉餅のような飲食物、鏡、人形、根付、扇、堤燈、雨傘、面といった異国人に関心を持たれそうな品、さては下駄・雪駄、螺貝、鼻紙、療治用の針、釣、仮髻、桑虫などにいたるまで広範に渡り、その品目数は135点の総数に昇った。

これら出品物の中で特に注目されるのは、字印板、錦絵、水茶屋などであった。

この願書を提出した折に、卯三郎は出品物の収集のために5万両の借金を申しで、まず手始めに1万両が貸し与えられた。一介の商人に1万両もの金額を5分の利息で貸し与えているところをみると、卯三郎と六左衛門は信用が厚く、とりわけ六左衛門は資産家だったことが容易に理解される。また、「己がよのき上」や「瑞穂屋用箋と書いた半截の和野紙へ薄墨で順序もなく書き記した、清水卯三郎の覚え書きとも称する一篇⁷⁾」を読むと、卯三郎は幕府にかなり顔がきいた人物だったのではなかったのかと思わせる。

清水卯三郎は小網町1丁目に一軒の家を借り、ここに品物を集めていたが、借りた1万両はたちまちにして底をつき、さらに幕府に1万両の借金をすることになった⁸⁾。ところで、卯三郎が借りた2万両だが、実は卯三郎の記憶違いで、実際には1万5千両ではなかったかと思われる節がある。

「民部大輔滞留費等の件外国奉行より栗本安芸守への書翰」（慶応3年10月晦日）の中に、「御不都合之次第申上候處さし向御國商人六左衛門卯三郎江御貸渡相成居候金壹萬五千両同人共品物売捌代金を以御取上御入用御遣払相成候旨に而⁹⁾」とあり、さらに勘定所の達書にも、「仏國博覧会江諸品差廻し方に付拜借被仰付候金壹萬五千両品物売捌次第返納之積¹⁰⁾」とある。

渡仏の際に船賃の捻出にさえ頭を悩まし、またパリでは売買のことで地元商人と折り合いがつかず、法廷で争ったことを考えると、渡仏前や滞仏中に5千両もの金額を返済していたとは、とても想像できない。「己がよのき上」は後日書かれたものだけに、卯三郎の誤記だったと考えられる。

卯三郎らの出品願書を受けた小栗上野介らは、慶応2年2月22日に早速、「卯三郎らは仏國博覧会に出品する品を取り扱うものであり、急に城

に呼び寄せることがあり、いちいち奉行の手を経ては間に合わないこともあるので、自分たちが直接に呼び出すので、この点承知されたい¹¹⁾」といった達書を米倉丹後守と町奉行へ送った。この年の3月に、横6分×縦1寸2分の黄楊でできた「博」と押した商人用の城内出入印鑑が作成されたので、卯三郎らもこの通行証を手で城を出入したことであろう。幕府のパリ万国博にかける執念をみせつける達書であり通行証であった。

専ら卯三郎が中心となって買い集めた品の保管場所は深川筋にあたり、漆器類は湿気のため状態が悪くなり、また盗難の恐れもでてきたため、卯三郎は慶応2年6月に、「何卒御上御蔵之内当分御不用相成居條御分も候は、¹²⁾拝借被成下置候」という願書を博覧会掛に提出した。この願いはすぐに上申され、同年7月8日「芝赤羽根元接遇所御構内御明蔵壹ヶ所¹³⁾」が倉庫として貸渡された。

最初、卯三郎らが願いでた出品物のうち、目付方、勘定方、外国方のいわゆる政府出品の品と重複する品目およそ50点ほどが除外されたが、それでも1180点もの点数が出品されることになった。「品目録書¹⁴⁾」によると、甲冑、馬具、矢、弓といった武器関係が51点、衣服が107点、錦、天鷲絨、縺子といった織物関係が130点、香箱、側簞笥、香盆、文箱、重箱、印籠、屏風、硯箱といった漆器類が347点、置物、盃、徳利、皿といった陶器類が101点、根付、筆筒、綱針のような彫器類が56点、髪髻関係が32点、500枚単位の錦絵、書本といった図書類が114点、傘・履物が33点、100枚単位での美濃紙、雁皮紙、模様紙類が18点、他に粳米、麥、大豆、茶、味淋、焼酒、醤油のような食料品、鎌や鍬の類、さらに釣棹、燈提、揚子、独樂のような小品から、駕籠、商家雛形や茶屋まで及んだ。これらの品物を買求めるために使った費用は32,709両余りで、これに利益を3割見込んだ42,522両余りが卯三郎らの出品金高で、この額がフランス人商人A. シェベリオン (Chevellion) の元に伝えられた。政府出品の合計高は47,190両余であったから、ほぼそれに匹敵する品物を

卯三郎らは出品したわけである。

慶応2年11月、これらの荷物を運ぶための船として、ペニンシュラ・オリエンタル郵船会社の「アゾフ号」(Azoff 600トン Baker 船長)と契約を結び、品川沖よりスエズまで運ばれることになった。この船の傭船契約賃は27,000ドルであったが、この額は慶応2年12月9日にA. シュベリオンの手を経て、日本政府はエージェントのウィリアム・デヴィソン(W. Davison)に支払っている。

「アゾフ号」は慶応2年12月15日(1867.1.20)に、政府出品物181個(または189¹⁵⁾個)、商人出品物157個を積載し、品川より横浜を経て抜錨した。この折、政府役人として外国奉行支配定役元締・塩島浅吉、通詞・北村元四郎らがこの船に乗船したが、商人側からも六左衛門と卯三郎の手代が同船することになった。「よしだ しろ(筆者注:吉田二郎、後の支那公使、ニューヨーク、ロンドン総領事)は ろくざえもん の だいら と して この ふね に のり そのほか しほうじ(筆者注:四方寺は現在の熊谷市、武洲幡羅郡四方寺村の名主が六左衛門)の ぜんぱち わ が いへ の くまきち¹⁶⁾」と「かねきち¹⁶⁾」であった。

清水卯三郎はパリ万国博覧会の日本館で茶屋を開き、3人の日本女性を茶屋に待らせ見物客を驚嘆させたが、この3人の女性の動向を伝えるものはなにもない。彼女たちの出国日も帰国日も、またパリでの行動も皆目解明されていない。不思議なことに、卯三郎の「己がよ の き 上」にさえ名前すらでてこない。ただ、当時の地元での新聞に彼女たちの姿を彫った銅版画が、かろうじて掲載されているにすぎない¹⁷⁾。男女同権にほど遠い時代のことだけに、女性に関する記述が少ないのは当然といえはそれまでだが、この3人の女性は間違いなく歐洲の土を踏んだ最初の日本女性たちではあった。

柳橋・松葉屋のお抱え芸者、すみ、さと、かね(可弥)の3人の出国は、多分、先に記述した「アゾフ号」でであったはずだと長い間思い込ん

でいた。芸者が徳川昭武と同船するわけではないし、当時の船の運行表を調べながらも、間違いなく「アゾフ号」に乗ったと推定されるものの、乗船客を調べる唯一の手懸りとなる新聞でも、「1867.1.20 アゾフ号 スエズへ向って横浜出航。積載荷物 美術骨董 (curious¹⁸⁾)」としか掲載されてなく、この面の追跡は困難を極めていた。ただ、この船に乗ったはずだという根拠はなかったわけではない。それは、「アゾフ号」の荷物輸送の雇賃は27,000ドルではあったが、この船に船客を乗せることは借主の自由で、食費を支払うだけであとの船賃などは無料だったからである。この船賃の無料は、財布も底をついていた卯三郎には吉報だったはずである。この頃の船賃は、普通の2等船客であっても、横浜・スエズ間はひとり310ドルという高運賃だった。3人の娘の船賃1,000ドル余りの金を無駄にするような卯三郎ではなかったはずと長い間思い続けていたが、「杉浦家記」の中に極めて興味ある一文があった。「杉浦家記」は、徳川昭武に同行してパリを訪れ、後に初代駒形正と化した杉浦讓 (愛蔵) の父・七郎右衛門 (護水) の日記である。

「(慶応二年)十二月十九日甲辰 陰

一男讓書信到, (一部略) 来三月有世界博覧会於佛蘭西, 出諸国土物, 日本使外国定役小塩高六, 男五人, 妓三人出茶店云, 本月十四日 (注: 品川を)¹⁹⁾ 出航, (後部略)」

この記録によって、3人の芸妓の出国日は明確になったが、杉浦讓はこれらの芸妓に多少は関心があったものか、讓の「帰朝日記」の中でも、彼女たちのことについて触れている。これは、卯三郎らのパリでの宿舎がどこであったかを教えてくれ貴重な資料でもある。杉浦讓は幕府の衰運のため、徳川昭武の留学を続けるかといった彼の将来のことを案じ、幕府と相談のため、慶応3年8月22日フランスを発った。この帰国直前の慶応3

年8月4日、杉浦譲は卯三郎らのいる宿舎を訪ねた。

「此夜は当地の名残にて多年之離別なれば遊おしみ、(一部略) アルニウテモンタンク (筆者注: Avenue Montaigne か?) へ罷越し卯三郎、二郎、三女子にも別れを告げ、夫よりガリレーニ (筆者注: Galilée 通りか?) にいたり、日比野 (筆者注: 御支配向日比野清作) 其他にも別れを告ぬ。第十一時宿に帰り石見守殿 (筆者注: 御作事奉行格山高石見守)、篤太夫 (筆者注: 御勘定格渋沢篤太夫) 等留別の詩を作る²⁰⁾」

この折、3人の芸妓はパリのグラン・ホテル (Grand Hôtel) で撮影した自分たちの写真の裏側に墨で歌を詠み、杉浦譲への餞別とした。正装をした3葉の写真と上半身像の3葉の写真が、彼女たちの姿を伝える貴重なものとして今も残されている。かね (可弥) の写真の裏面に書かれた歌だけをここで紹介しておく。

「しきしまのやまとにかへらせたまふ君のつれづれにはへりて茶などをくみたてまつらはやとおもう心はやんことなき身なればはつかしくまかげえ (筆者注: 写真の意) にひと言をそへてたてまつる

みもみぬもくるしき君のまかげえの

いまはあたなるかたみとこそなる

か ね²¹⁾

なお、この日本館内に設けられた茶屋の様子は、渋沢栄一の『滞仏日記』、杉浦愛蔵らの『航西日記』(巻三)、ゴンクール『ある芸術家の家』、メリメ『ある女への手紙』などからかなり明確に復原することができる。

出品荷物、手代や3人の芸妓を一足先に送りだした卯三郎だが、いざ自分の出国期日が近づいてみると旅費の工面ができず、六左衛門に相談したが彼とてあり金をはたいた後のことだけに金はなく、一時はこの渡仏をあきらめざるをえないところまで追い込まれた。卯三郎は、やはり昭武に随行した田辺太一を訪れ、旅費の不足を訴えると、田辺太一は心よくなにかがしかの金を貸してくれ、その上、卯三郎の末弟・喜六（当時22才）を自分の小使として同行を赦した。「これぞ ちごく にて ほとけ に あひる もの なり いと かたじけなし²²⁾」と卯三郎はこの時の様子を書いている。

苦心惨憺の末、卯三郎が乗り込んだ郵船はメサジュリー・アンペリヤル（以後、フランス郵船と略）所属の「アルフェ」号で、出航当日は午後から雨雪になった慶応3年1月11日（1867.2.15）のことであった。卯三郎の自伝「己がよ の き 上」は惜しいことにここで終わっている。「コレヨリ フランス ノ記事なり²³⁾」と末尾に書かれているところをみると「己がよ の き」の「中」か「下」があったのであろうが、今日発見されていない。

幕末・明治初期において日本よりフランスまで東洋航路で旅をするのは、かなりの乗り換えを必要とした。この点は、今日かなり誤ったまま記録されているものが多いので、簡単に記述しておきたい。一般に、横浜・上海間、上海・香港間、香港・スエズ間の支線と幹線に別れていて、上海と香港でそれぞれ別の船に乗り換える必要があった。さらに、スエズからアレキサンドリヤまでは鉄道を利用し、アレキサンドリヤでマルセイユ行きの船に乗り継がなければならなかった。

慶応3年1月11日午前9時に横浜港を出航した「アルフェ」号は、同月17日に上海に入港した。本来なら、ここで別の船に乗り換える必要があったが、たまたま「アルフェ」号は香港までの直行便であった。卯三郎

らは、やはりフランス郵船所属の「アンペラトリス」号に香港で乗り換え、アレキサンドリヤで「サイド」号にさらに乗り換え、同年2月29日(1867.4.3)にマルセイユに到着した。この航路の様子は『航西日記』に詳しいが、この中に、「仏国の郵船船号アンペラトリスに乗替る。アルヘー船よりは二層も大なる船にて尤清潔な²⁴⁾里。」と筆者にとってかなり気になる一文があった。この記録をみると、「アンペラトリス」号は、「アルフェ」号の2倍あったことになるのだが、現実には誤りではないかと考えられる。船室の間取りなどが広がったため、杉浦愛蔵がそう思っただけのこのように考えられる。下記の記録は、筆者がマルセイユのフランス郵船会社の古文書の中から書き留めてきたものである。

- *Alphée*: 1861年, ラ・シオタで建造. 総トン数 1,551. (1,700 トンの記録もあり). 馬力 1075 CV (400 chx nom.).
- *Impératrice*: 1860年, ラ・シオタで建造. 総トン数 1,551. (1,500 トンの記録もあり). 馬力 1400 CV (500 chx nom.).

この記録から判断すると、2倍の大きさどころか、全く同じ程度の船となる。1860年頃に建造されたフランス郵船の「カンボージュ」号、「ティーグル」号、「ドナイ」号などの総トン数は1,600余トンであることをみると、「アルフェ」号も「アンペラトリス」号もほぼ同じ大きさの船だったと考えざるをえない。

慶応3年1月11日に横浜を出航し、翌4年5月7日(1868.6.26)ニュー・ヨーク、サン・フランシスコを經由し、パシフィック・メール郵船の「コロラド」号に乗って帰国するまでの間の卯三郎の動向は全くわからない。だが、パリでの卯三郎の行動を彷彿させるものがないわけではない。

1868年3月24日(慶応4年3月1日)、パリでレオン・ロニー(Léon

de Rosny 1837-1914) が日本字新聞「よのうはさ」を発刊した。ロニーについては、福沢諭吉の『西航記』、福地桜痴の『懐往事談』、栗本鋤雲の『暁窓追録』、成島柳北の『航西日乗』その他で、彼らがパリで接触の機会を持っていたことを記述している。ロニーは来日することは一度もなかったが、後に東洋語学校の教授となった東洋通の学者であった。ロニーのこの日本語新聞「よのうはさ」の日本文字は、全体が実に達者な漢字と平仮名交りの変体書きのものであることから、この新聞刊行の際にだれか日本人が協力したことが考えられ、その日本人が清水卯三郎ではなかったかと想定されている。中には、「其表題の文字は明かに清水の自筆と認め²⁶⁾」とする記事もみられる。

卯三郎は、万延元年（1860）に日本で最初の商業英会話書ともいえるべき『ゑんぎりしことば あきうどのもちひ ならびに あひばなし』を全文仮名文字で出版し、明治7年5月刊の『明六雑誌』（7号）に「平仮名ノ説」を発表する傍ら、『ものわりのはしご』（明治7年）、『かなのみちびき』（明治16年）といった平仮名の実践書を著した。さらに、明治22年の憲法発布日の前に、時の文部大臣・森有礼に宛てた天皇陛下万歳に関する建議書、明治28年の宮内大臣に提出した建白書では仮名文字で書き、学校教育には仮名文字のみを使うべきだといった論述をしている。また、新聞の投稿にも全文平仮名書きで投稿している²⁷⁾といったように、徹底した平仮名書き論者であった。このような卯三郎と、パリで発行された新聞「よのうはさ」の題字との結びつきは極めて自然であったと考えられる。題字ばかりでなく、この新聞記事の「まかけゑ（写真の意）のいろとり」、²⁷⁾「新発明火器の事」「エレキ伝信器」をはじめその他の記事も、卯三郎が関心を持っていた事柄の記事で、「よのうはさ」の大半の記事は卯三郎の手になったものと判断してよい。この新聞は卯三郎が帰国の際に携えてきたらしく、江戸ででた『遠近新聞』（慶応4年6月3日号）や岩田吟香の『もしほ草』（慶応4年6月10日号）に、「よのうはさ」からの転載

記事がのった。

ロニーと卯三郎の出遇いによって、卯三郎は新聞、印刷の面に興味をそそられたものか、彼は明治2年3月20日に『六合新聞』を創刊し、凸版印刷機や石版印刷機の輸入をしては、出版事業に手を染めていくようになっていった。

清水卯三郎がパリ万国博覧会に参加し、欧米諸国を歴遊して持ち帰った品に、「活版器械、石版器械、陶器着色、礦物標本、西洋花火、等があった。」²⁸⁾この点を詳述する紙面はないので、簡単に触れるにとどめたい。

活版印刷については早くから強い関心があったらしく、慶応2年の万博出品目録に「字印板」の文字が読め、フランスへ出発する時に宮城玄魚に書かせた平仮名の版下を用意していた。だが、フランスで造らせたこの平仮名活字は、義太夫の本の如く、扁く読みにくかったために活用されずに終った。卯三郎は帰国後にニュー・ヨークのジョッピング会社の足踏活版印刷機を輸入し、これが篠野伝平や岸田吟香の東京日々新聞社に750円で売られ、『東京日々新聞』の創刊号以降の印刷に使用されることになった。

石版印刷機は凸版印刷機よりも早く輸入され、浅草の天王町に仮店していた店先に装置され、明治2年刊の福地桜痴の翻訳書『外国交際公法』の出版の際に利用されている。石版印刷機の日本人による輸入は、卯三郎を嚆矢とするものと考えられるが、この石版印刷機は後に「北海道開拓使に納付し」²⁹⁾たというから、大いに活躍したことであろう。

陶器顔料は、もちろん西洋陶器の顔料で、絵付けに用いる酸化コバルトなどであった。これは明治2年に鍋島侯の知るところとなり、同年9月卯三郎は有田皿山まで、その使用法の伝授のため赴いている。酸化コバルトや酸化クロームの輸入も卯三郎が最も早かったらしく、「本邦陶造の顔色を改むるものは、明治元年、余仏国より持帰たるを以て始とす」³⁰⁾と明治10年新聞に広告をだし、今また新たに輸入したので安く販売すると書いた。

礦物標本については、卯三郎の「紀州産石炭鑒定の説」³¹⁾に詳しいので、ここでは省略する。

徳川昭武一行がフランスで驚嘆した最たるものは、1867年8月15日にフランス皇帝の誕生を祝って凱旋門で繰り広げられた花火であった。杉浦愛蔵は「帰朝雑誌」の中でこう書いている。

「花火の巧みな御国（日本の意）風とハ違い、四方より四五本つつ一時に打揚げ、赤、白、碧、紫、薄緑、浅黄其他の色発して光彩を為し…³²⁾…」

清水卯三郎のこの日の様子を書いた記録は残念ながらない。だが、この日の花火を目にし、さらに帰国の途中、サン・フランシスコで米大統領の改選の際に目撃した花火は、彼の脳裏から離れることがなく、後日、卯三郎は西洋花火について次のように記述している。

「西洋烟火の、奇火異光を呈するに至りてハ、又、本邦の人の知らざる處なり、余曾て佛國に在り、烟火を觀ること数回なり、驚歎の餘り、其葯品数十種を購求めて歸る。³³⁾」

この持ち帰った花火を早速にでも打ち上げてみたいと思いつつも、戌辰の役でそれがかたならず、翌明治2年に日本橋本町3丁目20番地に移転したあと、自宅「瑞穂屋」の前で「蠟燭の如く作」って実験した。この花火は、「火光灼爍として臙脂の如く、市街を映照すること、恰斜陽の西山に没さんとするに等し、市中ハ未だ此の異光を知らず、皆見て回録の災と為し、急聲火と呼ぶ。人集りて蜂群の如し」³⁴⁾であった。この花火は打ち上げ式のものでなく、薬品に火を付けるだけのものであったが、西洋花火を知らない人たちは、「眞紅の光満街を照した」³⁵⁾のをみて火事かと騒ぎ、近

くの湯屋に入っていた人々が丸裸で外に飛びだし、一騒動が持ち上った。このことで、卯三郎は役所より小言を言われたが、「花火は揚げやしない燃したに過ぎない又花火と知らないで驚いたのは驚いた人々の知識が足りないので私の責めではありません」とすまして言ったと卯三郎の子息・清水連郎は書いている³⁶⁾。

卯三郎の花火熱は役所の小言や、町内の人たちのために出した謝り状とは裏腹に、なおも研究は続けられ、人々が「大に恐怖せし」ことから、明治14年にイギリス人・スポンの「オエクシオップ」³⁷⁾を『西洋煙火之法』として訳述した。と同時に「烟火之薬品」をも瑞穂屋で販売した。なお、卯三郎にはフランス語から訳した『佛国新法煙火全書』(第1編は明治20年7月刊、第2編は明治21年11月刊)がある。

これはフランスみやげとは言えないまでも、少なくともフランス行きと大きな関連があったものに、洋書の輸入がある。かつて、明治初期のフランス文学の移入について稿をまとめたことがあったが³⁸⁾、瑞穂屋卯三郎も積極的に輸入に心懸け、中にフランス図書も多くあった。例えば、明治8年4月の「輸入佛國書籍」の広告をみると、「フェデロン・テレマック、ラブレイ学術字書、ルーソウ・セフ ドウーブル、モンテスキイ・スピリット ド ロワー、タニール・万国史」など34点の書名がみられ³⁹⁾、卯三郎の広範な知識欲がそこにみてとれる。

清水卯三郎が幕府に1万5千(2万)両を借り、自分たちの財産を投げうってパリ万国博に出品した合計42,522両余の金額は、今の金額にすると数億の単位であることは間違いないが、比較・検討する適切な材料がない。最も安定した米にしても、幕末・明治初期の不安定な日本の政治社会状況の基では非常に変動がはげしく、大阪と宮城とでは倍もの差があった。それでも、米1石が3両ほどであったから、卯三郎の出品高の概算はできる。

卯三郎らの出品した品物が現実にどの程度売れたのかは不明だが、卯三郎らが当初みこんだ売り上げを大きく下回ったのは事実であった。これらの売れ残りの品は、フルーリ・エラール・日本総領事が間に入り、パリの商人・A. シュベリオンに販売の委託をすることになった。1868年1月10日、二郎および卯三郎とシュベリオンとの間に契約された「博覧会の品物売捌方の約条書⁴⁰⁾」によると、卯三郎らが預けた品物の総額は、212,763フラン60サンチームであった。当時はもちろん、フランと円の為替相場など存在しないので、この金額が実際どの程度の円に相当するのか算出できないが、明治10年代においては1ドルが1円、1フランが40銭であったから、ある程度の目安はつく。先の総額のうち、卯三郎は75,000フランを内金として受け取り帰国した。シュベリオンの手元に残された品物が、後日よく売れば問題はなかったが、1868年1月10日より1869年10月10日迄の間に売れた額は、総額の1割たらずの26,939フラン10サンチームでしかなかった。卯三郎が内金に受け取った75,000フランには年6分の利息がつき、品物の品質が落ちると共に売り上げは落ち、保管場所の費用等も嵩んでいった。

1869年4月8日のシュベリオンよりフルーリ・エラールに宛てた書簡によれば、「次郎、卯三郎君ノ為ニ負債トナル高 七万五千六百三十四フランク三十サンチム⁴¹⁾」であった。この書簡の中で、卯三郎らのことについて下記のように示している。

「次郎卯三郎君トノ約定ノ儀ニ付余今貴君ノ注意ヲ希フ余ハ其約定ノ通りナサバ右兩人ニ大ナル費用ヲ生スベキヲ以テ約定ノ等計ヨリモ更ニ其費用高ヲ減シタリ

余又貴君ノ注意ヲ希フ芟アリ皮類ノ如キ天然物ハ我店ニアリテ腐敗シ且追日時候災熱トナリテ (一部略)

次郎卯三郎君ノ勘定ニ入ルヘキノ費用ト並ニ此兩人へ前拂シ置キタル七

萬五千フランクノ高余ガ手ニ戻リ来ル様ナル手段ヲ設ル事極テ必要ナ
42)
リ」

こういった品物の処理問題は、明治新政府になった後も尾を引き、フルーリ・エラールの後に日本総領事に任命されたモンブランの代にまで持ち越されることになった。

幕府と商人がパリ万国博覧会に出店したことが、およそ30年に渡るフランスでの日本熱高揚の導火線になり、特に数多く出品された浮世絵、錦絵、書籍類はさほど金額もはらず売り捌けていった。万国博終了後、売れ残った品物の売り払いのため、フランス国内の「ル・デバ」(Le Débat), 「ル・シエクル」(Le Siècle), 「ラ・フランス」(La France), 「ル・ペイ」(Le Pays), 「ラ・プレス」(La Presse), 「ラ・パトリ」(La Patrie), 「ラ・リベルテ」(La Liberté), 「ジュールナル・ド・パリ」(Journal de Paris) など数多くの新聞に売り捌きの広告が出された。これらの新聞広告を見、万国博会場を訪れて、品物購入をしていった人たちとはどんな人々だったであろうか。大勢の作家や印象派を生みだした画家たちがいたのは、残された作品を通じて知ることができるが、次のシュベリオンの手記にある人名の追跡から、さらに新しい発展がこの分野で期待できそうに思われる。

「佛朗西及外國ノ高名ナル好事家及芸術家ニ品物ノ目録案内状等ヲ差送リタルニ付、見分ニ来レル人数多ニシテ、其内最高名ナル人々ハ、プランセス・マチルダ殿下、モッシュール・ドロアン・ド・ロイス、マレサル・レグノール・ド・サンジャン・ダンゼリー閣下、マリキー・ヨウヂフレー、ヂュック・ド・カムバセレー、マレサル・ホレー閣下、ヂュック・ド・ブロクリー、バロン・チパン、モンセギュール・セーギュール、バロンス・サロモン・ド・ロッチールド、マルキー・ド・ラムバール等

43)
ナリ。」(句読点は筆者)

清水卯三郎は、吉田二郎と共に万国博への貢献が認められ、ナポレオン三世より銀メダル（直径 5センチ余，重さ 70グラム）を与えられた。

「丁卯七月一日配分方

右兩人ハ産物種類分進なしたるに付贈之次郎に銀メダル壹 卯三郎ニ同断⁴⁴⁾」

この銀メダルの裏面には「OUSABOURO」と刻まれている。

特に、1869年3月頃より出品物の残品はほとんど売れず、卯三郎らのつけた値段の半分位に値引きするようにフルーリ・エラールが日本の外国事務執政閣下に進言した書信⁴⁵⁾をみると、商売という点からみると、必ずしも成功裡に終わった万博参加ではなかったということになる。多額の借金を抱えた卯三郎ではあったにしろ、この万国博への参加は、僅か銀メダル1個の収穫でしかないように表向きではみえるが、彼のその後の生涯には大きな支えとなったのであった。

- 注 1) 「佛国フロリヘラル免職全モンブラン任職之大意」（『交際典例及関係書類』に含まれている文書。国立公文書館蔵）。
- 2) 『徳川昭武滞欧記録 一』1頁。
- 3) 『徳川昭武滞欧記録 二』331-332頁。
- 4) 「己がよのき上」（長井五郎『しみづうさぶろう略伝』に所載の清水卯三郎の仮名で書かれた自叙伝。320頁）。
- 5) 『徳川昭武滞欧記録 二』332-333頁。
- 6) 同上，335-340頁。
- 7) 宮本良「忘れられた先覚者 瑞穂屋卯三郎(-)」(『変態資料』昭和2年4月25日号所載，80-90頁)。
- 8) 注4)に同じ。320-321頁。
- 9) 『徳川昭武滞欧記録 一』415頁。
- 10) 同上，418頁。
- 11) 『徳川昭武滞欧記録 二』332-335頁。

- 12) 『徳川昭武滞欧記録 三』 110-111 頁。
- 13) 同上, 111-113 頁。
- 14) 同上, 358-407 頁。
- 15) 『徳川昭武滞欧記録 二』 485 頁には, 「政府より差送候品物 箱数 百八拾壹」とあるが, 『徳川昭武滞欧記録 三』の 291 頁では, 「荷数 百八拾九」とある。
- 16) 注 4) に同じ。321 頁。
- 17) “Le Monde Illustré”
“The Illustrated London News” 1867.11.16 号。
- 18) “The Daily Japan Herald” 1867.1.21 号。
- 19) 『杉浦讓全集』第 2 卷, 35 頁。昭和 53 年刊。
- 20) 同上, 62-63 頁。
- 21) 『初代駅漕正杉浦讓伝』 145 頁。昭和 46 年刊。
- 22) 注 4) に同じ, 325 頁。
- 23) 同上, 326 頁。
- 24) 『航西日記』(卷一) 明治 4 年刊。
- 25) 1868 年 6 月 3 日, サン・フランシスコ出港の「コロラド」号に乗船したが, この船には 240 名の乗客がいた。清水卯三郎は一等船客だったと思われる。なお, 当時の桑港・横浜間は, 1 等が 250 ドル, 2 等が 170 ドル, 3 等が 85 ドルであった。この折の乗船名簿には, 「M. Onsalboro」とあるが, 「M.」は瑞穂屋卯三郎の屋号の頭文字であったと思われる。
- 26) 渡辺修二郎「清水卯三郎の事一二件」(『新旧時代』大正 14 年 6 月号所載, 57-58 頁)。
- 27) 『郵便報知新聞』明治 8 年 11 月 7 日号。この時には, 「本町 瑞菴老人」の名で投稿している。
- 28) 井上和雄「みづほ屋卯三郎(中)」(『新旧時代』大正 14 年 6 月号所載, 51 頁)。
- 29) 『名家叢談』18 号。(この号には, 卯三郎が石版についてかなり詳しく書いた一文がみられる)。
- 30) 『読売新聞』明治 10 年 8 月 4 日号。
- 31) 『中外新聞』明治 2 年 8 月 26 日号。
- 32) 『杉浦讓全集』第 2 卷, 94 頁。
- 33) 『佛国新法煙火全書』第 1 編の小引。明治 20 年刊。
- 34) 同上。
- 35) 『明治事物起源』(下巻) 1193 頁。
- 36) 清水連郎「瑞穂屋卯三郎のこと」(『新旧時代』大正 14 年 12 月号所

- 載, 44-46 頁)。
- 37) 『西洋煙火之法』序文。明治 14 年刊。
 - 38) 拙稿「明治初期におけるフランス文学の移入」(『千葉敬愛経済大学研究論集』17・18 合併号)。
 - 39) 『郵便報知新聞』明治 8 年 4 月 25 日号。
 - 40) 「仏國博覧会一件書類」(「交際典例及関係書類」に含まれている文書)。
 - 41) 同上。
 - 42) 同上。
 - 43) 同上。
 - 44) 『徳川昭武滞欧記録 三』262 頁。
 - 45) 注 40) に同じ。